

トルコにおける考古学と、その社会との関わりに対する調査

文学部人文社会学科 西洋史学専攻 2年

森田 崇仁

複合経験

7月28日から8月16日までトルコに行き、2週間の考古学フィールドコースに参加、そしてアンカラ・イスタンブール観光を行った。考古学フィールドコースとは、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所が主催するプログラムであり、その目的は発掘調査のシステム、遺跡・遺物の保存修復の理念を学ぶことにある。つまり、考古学の前段階にあたる発掘調査に、このプログラムの焦点が当たっていることになる。詳しくは後述するが、本プログラムには考古学の「さわり」にも接する機会もあり、簡単に言い切ることができないが、私がトルコで体験したことの多くは、こうした技術的な要素に関するものだった。しかし、20日に渡るトルコでの生活は、フィールドコースを通しての学術的な体験であるだけでなく、異国・異文化体験でもあった。

誠実であれ

私が2週間を過ごしたのは、首都アンカラからバスで2時間のところにあるカマン群チャウルカン村だ。アナトリア高原のほぼ中央に位置するチャウルカン村の周りには小麦畑が広がっており、私が訪れた7月の下旬には収穫を終えた小金色の畑に、農作業車のわだちが茶色に浮かび上がっていた。アナトリア考古学研究所は、チャウルカン村のはずれの高台にある。私は他大学の生徒8人と共に、この研究所で寝泊まりをしながら、二週間のフィールドコースに参加した。まず初めに、アナトリア考古学研究所所長であり、カマン・カレホユック遺跡調査隊長である、大村幸弘先生の講義を受けた。講義の中で強調されたのが、「誠実である」ことだ。出土位置や状況は、発掘者以外の人間が確認することが難しく、そこで行われた偽装を指摘することは困難である。だからこそ、誠実に発掘することが求められる。



何をしているのかを知る

講義の翌日から、遺跡に入って発掘作業に参加した。私が参加したのは、カマン・カレホユック遺跡の南区での発掘作業だ。カマン・カレホユック遺跡では、文化編年構築を目的

¹ 『アナトリア考古学研究所ホームページ』 <http://www.jiaa-kaman.org/jp/event/04.html> (2018年8月21日)

とした北区と、ヒッタイト期から前期青銅器時代の遺構が確認されている南区の2つの発掘区で発掘が行われている。北区で一つの班、南区では2つの班が発掘しており、それぞれの班はウスタと呼ばれる現場監督の指示に従い発掘を進めていく。ウスタは日本字の学生を毎年受け入れており、日本人相手の説明に慣れているからか、トルコ語を解さない私でも発掘の手順を少しずつ理解することができた。発掘の手順とは、以下の様なことである。まずは、掘り下げを行う。そのなかでピットや遺構と思わしき痕跡や、地層の変化に気がつけることが重要となる。掘り下げや、遺構の発掘が終わると、清掃を行う。スプリゲ（ほうき）やゲルベル（鋤簾）を用いて、発掘の際に出た灰や細かい砂を掃除していく。この作業は次の工程である記録・撮影の準備のために行われる。そして、ゴンドラを使っての上空からの写真撮影や実測図の作成が終われば、また掘り下げを行うのだ。自分の作業が、このサイクルのどの工程にあたるのかを把握することが、重要だと感じた。

査察官

発掘には、トルコの考古局から派遣された査察官が常に同行している。大村先生は食事の際、必ず査察官の正面に座り、コミュニケーションを密に交わしている。そのわけには、外国発掘隊のおかれている立場が関係している。発掘隊は考古局の許可がなければ発掘を行うことはできない。それだけでも、査察官との関係が大切であることが分かるが、カマン・カレホック遺跡ではトルコ人労働者と査察官が同調しストライキを行った事例も過去一度だけだが発生していることもある。また、査察官と良好な関係を結ぶことで、発掘以外の文化振興活動もスムーズに行うことが期待できるという。そんな中、査察官と外国発掘隊の関係が問われる事件が発掘4日目に発生した。その日は前日から密着取材を行っているトルコのテレビクルーと、イスタンブールに住む日本人家族が、遺跡を見学に訪れた。松村先生が日本人家族に遺跡を説明していると、大村先生がクルーの相手もするように促した。査察官としては、トルコでカマンの遺跡が報道されることは、自分の管轄の成果を広めるチャンスでもある。つまり、日本人家族の対応にかかりきりになり、テレビクルーへの対応がおざなりになっている状況は面白くないのだ。さまざまな協力のもとに成り立っている発掘事業は、こうした細かい気配りも求められるのかと、気づかされた事件だった。

広げた風呂敷を畳む

発掘は午前6時から午後2時までで、研究所に戻ると午後6時から始まるミーティングの準備に取り組んだ。ミーティングではその日の発掘作業を英語またはトルコ語で説明する。ミーティングにおいては、簡略にそして分かりやすく説明することと、実際にその説明で納得させることが求められる。ミーティングでは、大村先生を始めとした参加者から、質問が多く飛んでくるため、中途半端な準備では針のむしろのようになってしまう。私たちの班では、ピットの新旧関係という問題について取り組んだが、良い発表だったと自認で

きたのは、その問題について取り扱った最後の発表だけだった。なぜ、良い発表をできなかったのかというと、その日のうちに結論を出すことが難しい問題まで手を出してしまい、発表としてのまとまりを欠いてしまったからだ。要するに、大風呂敷を広げてしまったのだ。

土砂の下

発掘作業は、数十年間の作業の積み重ねでもある。今、自分が行っている発掘が、数年前の発掘の続きということもある。その場合、発掘が行われていない間に積もった土砂が、遺構の本来の姿を隠してしまうことがある。私たちが作業したピットは、まさにそのような状況にあり、その状況を整理するには過去の発掘日記や実測図に当たる必要があった。そうした記録は、発表の際、大きな武器となると同時に、私たちの頭を悩ませるものでもあった。私たちは、まず土砂の積もった状況であることを説明し、当時の発掘日記の記述を紹介した。しかし、日記から情報を上手に抜き出すことができず、中途半端な発表になってしまった。翌日の発表では過去の実測図を用いて、現在発掘しているピットが過去の発掘ではどのように発掘されていたのかを確認した。その際に、平面的な位置関係だけを確認するのではなく、レベル(海拔標高)を測る必要性を指摘された。そして、その翌日、レベルを測りようやく、数年前の発掘と現在の発掘がつながり、頭の中で整理された。私は最初、日記を読めば充分だろうと考えた。しかし、日記に書かれていた情報はとても限られていたため、それだけでは納得させる発表にはならなかった。

文字だけでは追いきれない

人間の記憶は脆い。だからこそその日の発掘をその日の内に日記に残し、それを蓄積する。私たちフィールドコースの参加者も以上の説明を受け、実際に日記を毎日書いた。だからこそ、日記を書く難しさとその制約も少しながら感じていた。誰が読んでも理解できるのが、日記には求められる。しかし、分かりやすく書くことを意識すると、出来上がった文章からはディテールが失われてしまう。私が当たった日記も、私が知りたいことは、一文で書かれていた。しかし、その一文を抜き出しただけでは、当時の発掘状況を理解することはできない。間違ったことを日記が書いているわけではない、ただ、足りないのである。そのために、写真、実測図等に当たる必要がでてくるのだ。記録に残すことの難しさ、とりわけ文字記録の如何ともしがたい頼りなさを思い知った体験だった。

納得いくミーティング

レベルを測り、過去の発掘と現在の発掘の関係を理解した私たちだったが、ピットの新旧関係に対して答えを出すことはできなかった。発掘を進めてさらなる情報を得る必要があったのだ。なにやらひどく遠回りしてしまった気分だったが、同時にこれが「考古学」だとも感じた。焦って答えを出そうとしても、1日の作業量には限りがある。だからこそ、

地道に今日の発掘作業の報告を積み重ねる。その中で初めて答えを出せる瞬間がくる。ミーティングの発表も、1日の作業の範囲を超える内容では、かえって聞く人を混乱させるだけになる。地道な下調べは、答えを出せる時にどんな指摘にも耐えられる根拠として、その時に出せばよいのではないかと、そう感じた。レベルを測った日のミーティングで「まだ分からない」と言った時、一種の自信があった。なぜなら、その「分からない」には、どんな指摘にも耐えられる根拠があったからだ。

遺物研究

ミーティングと並行して、研究所では遺物研究の作業を行った。遺物研究とは、フィールドコース参加者が1人1つ遺物を選択し、観察や比較研究を行うものである。実際の遺物を用いて、写真撮影や実測図の作成を行う貴重な経験だった。比較研究では、遺物の発掘状況から大まかな遺物の年代を特定し、その時代と並行する他の遺跡の遺物を探し比較研究を行うことが目標とされていた。ミーティングの準備の合間を縫って資料を集め、なんとか最終日の発表に間に合わせることができた。限られた時間の中での準備となったが、満足いく比較研究を行うことができた。その過程で、ドイツ語の文献を用いる必要があったが、第二外国語でドイツ語を取っていたため、辞書を使いながら読み取ることができた。大学での勉強が役立ったと感じ、非常に嬉しく感じた。

生活のリズム

以上がフィールドコースでの大まかな活動である。発掘作業は肉体的にハードな内容であったため、研究所に戻ってからのミーティングや遺物研究の準備は、疲れ切った体で臨む必要があり、最初の頃は負荷を強く感じた。しかし、発掘作業で「上手にサボる」方法や、ミーティングのコツが掴めてくると、リズムよく日々のタスクをこなすことができた。それ以降は、生活の車輪が綺麗に回る感覚を維持したまま二週間を過ごすことができた。その全てにおいて、大村先生を始めとしたアナトリア考古学研究所の皆様や、他のフィールドコース参加者のサポートがあった。

ボアズキョイ

日曜日は発掘が休みになる。この日を利用してフィールドコース参加者は、ヒタイト帝国の首都ボアズキョイの見学を行った。現在もドイツ隊による発掘が行われているこの遺跡は、平な台地と切り立った岩山にある。私は、まずその広大さに圧倒された。その裾野にあたる、当時の市壁でドイツ隊の発掘が行われていた。発掘隊長のアンドレアス・シャフナー氏本人から、発掘状況について説明を受けた。そ



の後、松村公仁先生の解説を受けながら、ボアズキョイそしてアラジャホックを見学した。

外のこと

こうした貴重な体験の連続で2週間のフィールドコースは終了した。フィールドコースを終え、私は他大学の学生1名とアンカラ・イスタンブール観光に出発した。その時の私たちの頭の中にあっただのは、ある不安だった。8月10日、アメリカとの外交的な摩擦が貿易上の問題に発展することが懸念され、トルコリラが一日で20%も暴落したのだ。そうした混乱が、首都アンカラで現れていないか、治安は大丈夫なのか、そうした不安とは裏腹に、アンカラの市門をくぐった私たちを待っていたのは、2週間前カマンへ立った時に見たアンカラの姿そのままだった。2週間もの間を遺跡と研究所で過ごしていた私は、都会の喧騒や、ニュースといった社会とのつながりを思わせる事象から隔離されているような気分でした。しかしながら、フィールドコース中でさえ、雨音が戸を叩くかのように外の世界の喧騒はやってきていたのだった。

大統領の微笑み

8月10日は、私たちが発掘に参加する最後の日でもあった。その作業中、同じ班のトルコ人作業員が「広島についてどう思う」と私に尋ねたのだ。どうやら、8月6日に合わせてトルコでも広島での原爆投下についてのテレビ番組が放送されていたらしい。突然の質問にはぐらかしながら対応していると、さらなる質問が飛んできた。「アメリカについてどう思っている？」私はこれが本題だと感じた。この質問もはぐらかしながら、「アメリカについてどう思っているのか？」と逆に質問してみた。すると饒舌に語りだした。その中で何度も「アメリカは民主主義ではなく、日本では核爆弾を、中東では児童殺人をもたらす」、「トルコには民主主義は不要だ」と、繰り返していた。研究所に戻りトルコリラの暴落について知った時、アメリカとの外交上の対立という言葉が、やけに立体的に感じたのを覚えている。そして、アンカラの市門をくぐりアンカラの市内に向かう時、平穏なアンカラの様子に安心するとともに、二週間前と同じように街の至る所で微笑んでいる大統領のポスター写真が、二週間前とは違って見えた。喧騒は最初から私のすぐそばにいたし、フィールドコース中も離れることはなかったのだ。安心だけではない感情を抱えたまま、私たちのアンカラ観光が始まった。

アンカラ城

大統領と同じように街のいたるところで、睨みを利かせている人物がいる。その人物は、公共機関や、高校のような教育施設、はたまたタクシー運転手の休憩小屋にもいる。トルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクは、肖像画や銅像の形で現在もアンカラの街を見守っている。アンカラはアタテュルクによってトルコ共和国の首都として

定められるまで、人口2万5000人ほどの地方の小都市だった。アタテュルクが首都に定めたことで、アンカラの新たな歴史の幕が開かれたのだ。アンカラの中心地ともいえるウルス地区には大きなアタテュルクの像が建っている。私たちは宿泊していたホテルから、ウルスのアタテュルク像までバスで移動し、アンカラ見学を開始した。日中のウルス地区は、市場があり地元の買い物で賑わっているが、私たちが訪れた朝早い時間には人の姿はまばらで、アンカラ観光の目玉の一つであるアンカラ城へ至る道も静かだった。私たちは、まずアンカラ城の近くにあるアナトリア文明博物館を訪れた。博物館にはトルコ中から集められた遺物が多く展示されている。中には、遺物研究の際に用いた遺物もあった。その後、アンカラ城に向かった。アンカラ城は、市内を見渡せる高台に建っている。高台は切り立った斜面をもっており、この高台が防衛に適していると感じた。



アウグストゥス神殿

アンカラ城を発った私たちは、ラテン語碑文の女王と呼ばれる『神君アウグストゥスの業績録』の全文が刻まれているアウグストゥス神殿に向かった。残念ながら崩壊の危険がある神殿に近づくことはできないが、その姿を眺めることができた。神殿の周囲はショッピングモールが整備されており、周囲には噴水が作られ人々の憩いの場になっていた。ショッピングモールのところどころに、ローマンコンクリートの遺跡が残っており、遺跡を取り込むようにモールがデザインされていた。意外な姿に驚きながらも、アンカラ観光を終えた。



イスタンブール

翌日、飛行機でイスタンブールに移動した私たちは、空港に到着したのち、トラムに乗って市内へと向かった。すると、テオドシウスの城壁が見えてきた。城壁に囲われた都市の姿に気持ちが高まりながら市内に入ると、トラムは満員状態になった。トラムの揺れに合わせて右へ左へと動き回るキャリーバッグに四苦八苦しなながら、目的の駅でトラムを降りた。荷物をホテルに預け早速、ヴァレンス水道橋へと向かった。ヴァレンス水道橋は、ローマ時代の水道設備で、イスタンブール中心地の地下貯水地に水を輸送する役目を持っていた。現存しているのは 800 メートルあまりだが、幹線道路を跨りそびえる姿は、その建設技術の高さを偲ばせる。徒歩での観光だったが、その人通りの多さや、あちこちにある歴史建造物にイスタンブールの持つエネルギーを感じた一日だった。



モスク

翌日は観光客もまばらな時間帯から見学を開始した。ハギアソフィア大聖堂とスルタンアフメット・モスクが向かい合うようにたっている観光広場も、観光客がまばらで、野良犬が芝生の上で寝転んでいた。観光施設の開館を待つ間、スルタンアフメット地区を離れ、ガラタ橋へと向かった。ガラタ橋は、旧市街と新市街を結んでおり、朝から多くの釣り人が釣り糸を橋の欄干から垂らしていた。スルタンアフメット地区に戻り、まずスルタンアフメット・モスクに向かった。

服装規定を満たしていることを確認しモスクの中に入ると、木の柵でモスク内部が分けられているのを発見した。ムスリム専用の礼拝エリアと観光客専用のエリアに分けられたモスク内部は、柵を境に空間の性質も異なっていた。観光客側には、観光客がカメラを向けるなり床に寝転ぶなどしながら、天井の細密画を鑑賞



していた。柵の向こう側では、祈りを捧げるムスリムの姿があった。ここでは、祈りと観光客が日常的に交叉していることを感じた。それと同時に、そこには観光客とは決して混じり合わない宗教的な荘厳さがあった。私は、幾何学的な建築構造と、それを埋め尽くすように施された細密画に、美しいを感じるとともに居心地の悪さを感じた。自分が門外漢であることを自覚させる美しく、そして冷たい空間だった。

ハギアソフィアの光

スルタンアフメット・モスクとは異なり、ハギアソフィアは博物館として全面開放されている。巨大な円蓋と多くの窓から差し込む日の光が、円蓋の中を光で満たしていた。そのため電気照明の少なさの割には、明るい印象があった。ビザンツ時代のモザイク装飾の大部分は後世の改築で失われているが、二階部分や南入口にはモザイク画がのこっている。『デイシス』のモザイクイコンは下半分が失われているが、その細密さや光を受けた姿が美しく、10分ほど足を止めて鑑賞した。その後、地下宮殿やトプカプ宮殿を見学し、ハギアソフィア前の広場に戻ってきた。夕暮れの時間を迎えハギアソフィアの長い影が広場に影を作り、金角湾からの潮風を感じられるほどになっていた。広場のベンチに座り、歩き疲れた足を休ませながら、ハギアソフィアを眺めると、旅の終わりを告げているように感じた。思えばこの2週間雨に降られることもなく、夜明けとともに発掘を行い、日が沈むと同時に寝ていたため、ずっと太陽に照らされて生活していたような感覚があった。夕暮れのハギアソフィアを背景に記念写真を一枚とり、その日の深夜、イスタンブールを発った。



活動を終えて

2週間の活動を終え1ヵ月も経っていない今、こうして報告書を書いて感じているのは、まだ活動の総括を行うことはできないだろうという、感触である。なるべく読む人が混乱しないように時系列順に、2週間の体験を整理して書くことを心掛けたが、全てを書くことはできなかったと思う。それでも、活動の目的である「考古学と社会の関係」について総括するならば、「働きかける」ことが大切だろうということだ。大村先生の査察官への対応一つをとっても、その大切さは実感した。しかし、「働きかけ」を躊躇してしまう瞬間は、

多いと思う。他人との「付き合い」や、煩わしい書類手続きに嫌気がさし、自分の領域に閉じこもってしまう、そんな瞬間に今回の体験は以下の前提を提示してくれる。まず、どんなに嫌であろうと、他人や社会は自分の生活に不可欠なこと。2つ目に、他人や社会は「働きかける」ことでしか接触できないこと。この2つの前提は、今回の体験で強く実感したことで、恐らく私のこの後の人生でも変わらぬ「信条」になるという実感がある。後は、実践の場で活動の成果を生かすことが必要だろう。その中で、いつの日か総括ができるのかもしれない。その日を待ち望む高揚感は、自分の中で熱くなっている。まだ、トルコの陽は、私に射しているのだ。